特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会（第53回）

日時：令和5年1月24日（火）13:00～15:00
場所：名古屋市公館　レセプションホール

会　議　次　第

1　開会

2　あいさつ

3　議事
(1) 鵜の首（小天守西）の水堀側石垣根石発掘調査の調査成果について　＜資料1＞
(2) 穴蔵石垣根石発掘調査（追加調査）成果について　＜資料2＞

4　閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会（第53回）

出席者名簿

日時：令和5年1月24日（火）13:00～15:00

場所：名古屋市公館　レセプションホール

■構成員　（敬称略）

氏　名	所　属	備考
北垣　聰一郎	石川県金沢城調査研究所名誉所長	座長
宮武　正登	佐賀大学教授	
西形　達明	関西大学名誉教授	
梶原　義実	名古屋大学大学院教授	

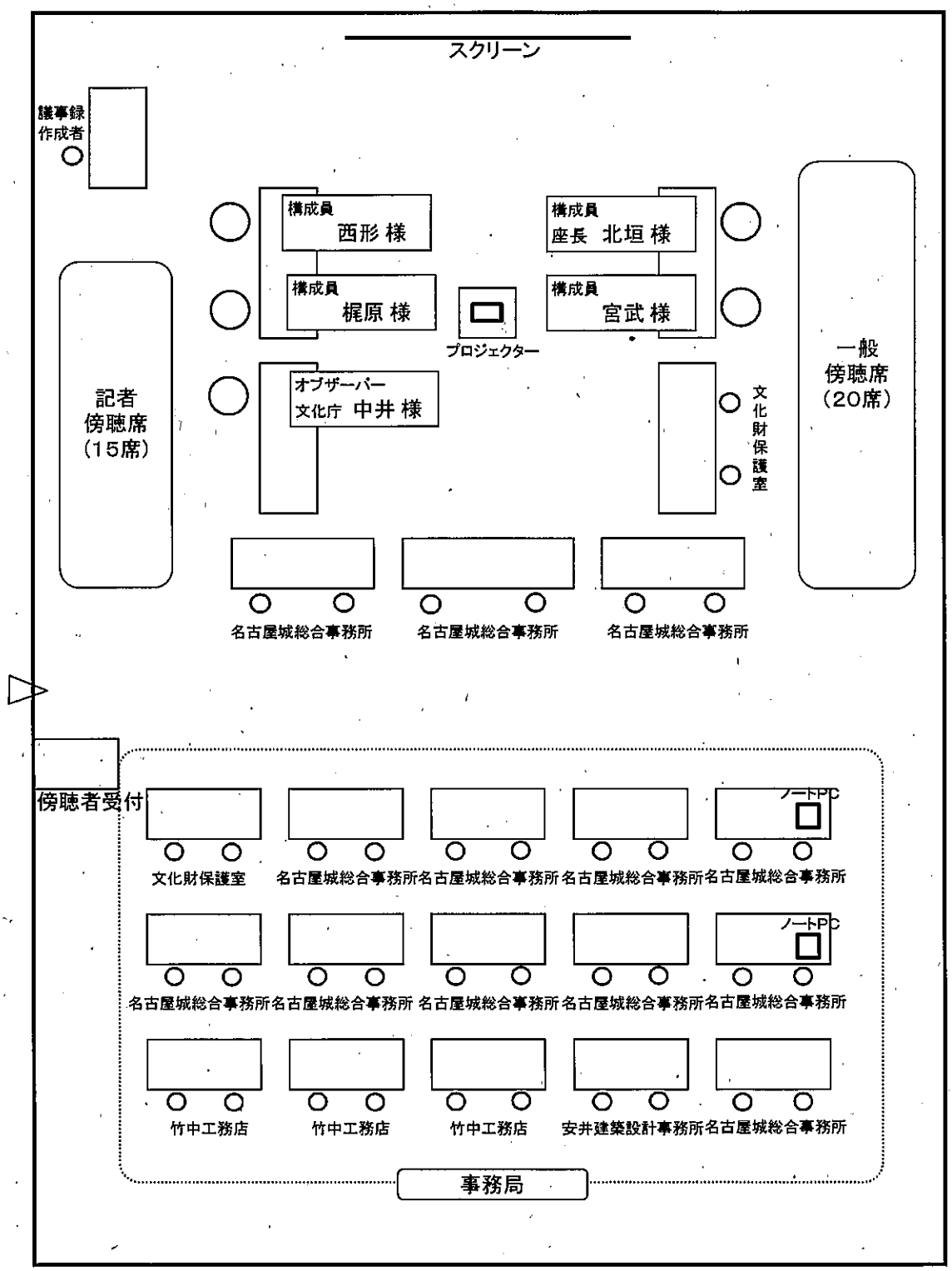
■オブザーバー　（敬称略）

氏　名	所　属
中井　將胤	文化庁文化資源活用課整備部門（記念物）文化財調査官

第53回特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣・埋蔵文化財部会

座　席　表

令和5年1月24日（火）
13:00～15:00
名古屋市公館　レセプションホール



鵜の首（小天守西）の水堀側石垣根石発掘調査の調査成果について

1　調査の概要

鵜の首(小天守西)水堀側石垣では裾部に突出が確認されている。その原因および石垣の安定性を把握するための情報を得るため、石垣前面に2か所の調査区(イ、ロ)を設定し、調査を行った。

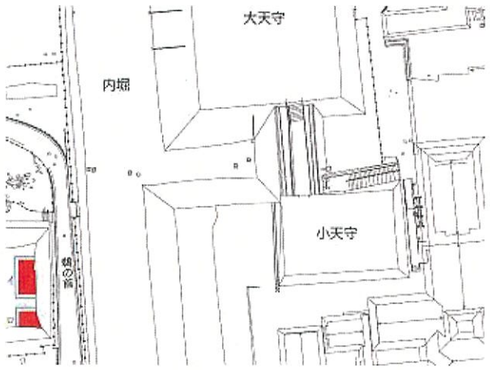


図1　調査区位置図

図2　調査区イ全景(北西から)

2　調査の成果

(1)調査区イ

地表より約30㎝を掘削し、瓦のみを含む近世層の可能性がある土層(4層)を検出した。

(ⅰ)層序

1層 表土
2層 黄褐色土層(プラスチック等含む。現代層)
3層 黒褐色礫混じり層(プラスチック等含む。現代層)
4層 褐色礫混じり層(瓦のみ含む。近世層の可能性あり。)

図3　調査区イ南側ベルト層序(北から)

(ⅱ)新たに検出された石列

石垣突出部の南側を掘削したところ、突出部に連なる石列を新たに検出した。構成する石材には刻印が見られ、近世層(4 層)中に埋まることから、近世に設置されたものと考えられる。

新たに検出された石列は、現状の鵜の首石垣の下に石尻が入り込むが、石面は50㎝ほど前へ突出する。両石垣の間には3層の土が入り込んでいるため、接続状況は現時点では不明であるが、この石列の上に現在の石垣面（濃尾地震時か）が積み上げられている可能性も考えられる。

石垣に伴う根切等の遺構は現時点では確認できないため、石列の下部にさらに石がある可能性も考えられる。

(2)調査区ロ

(ⅰ)層序

地表より約60㎝を掘削し、近世盛土層(6層)を検出した。

1層 表土
2層 黄褐色土層(プラスチック等含む。現代層)
3層 黒色土層(プラスチック等含む。現代層。旧表土か。)
4層 褐色礫混じり層(瓦のみ含む。近世層の可能性あり。)
5層 褐色土層(瓦のみを多量に含む。近世層の可能性あり。)
6層 灰褐色土層(遺物を含まず。近世層。)

図4　調査区ロ全景(西から)

図5　調査区ロ西壁層序(東から)

(ⅱ)新たに検出された石材

2層掘削中に大型の石材を2石検出した。石材の大きさは50×15㎝程度で、南北に長い長方形である。大型の矢穴痕を有するため石材自体は近世のものと思われるが、3 層(現代層)中に埋まる。調査区東、南側の石垣とも接しないが、調査区イの石列とは直交し、南側の

石垣とは平行する方向で置かれている。

図 6　新たに検出された石材(北から)

図 7　新たに検出された石材(西から)

(iii)調査区南壁側の石垣の下部構造

調査区南壁側の石垣では、掘削により石垣を上下 2 段検出した。このうち下段は近世層(6 層)に埋まるため、近世に築かれた石垣の一部と考える。上段については、築城期以降の土層(4 層、5 層)中に埋まり、下段の石垣に対し石面が 15 cmほど奥に確認される。上段と下段には約 20 cmの隙間(間詰石が充填)も確認できる。このことから、上段の石垣は築城後に積み直された可能性がある。

図 8　調査区南壁側の石垣(北から)

図 9　調査区南壁側の石垣(東から)

3　まとめ

・調査区イ、ロで近世の可能性がある土層を検出した。
・調査区イでは石垣突出部より続くと考えられる石垣の延長を検出した。
・調査区ロでは地表より約 60 cmで近世盛土とそれに埋まる石垣を検出した。
・今後さらに掘削を進め、石垣下部の状況を確認するとともに、遺構および土層の時期特定に努める。

穴蔵石垣根石発掘調査（追加調査）成果について

(1) 調査目的

大天守穴蔵石垣北面に設定した①調査区では、近世に遡ると考えられる石列を検出したが、その上部に存在する穴蔵石垣の一部についてその時期が確定できてない。調査区東側には積み方、から近世に遡る可能性がある石垣が存在するが（図 3 上参照）、その石垣との連続性についても現状では明らかとなっていない。

調査区東側の石垣と石列上にある石垣との連続性を確認するため、調査区を東へ 2m 拡張し掘削を行い（図 2 参照）、石垣面の状況を確認した。

(2) 調査の成果

調査の結果、これまで検出している石列の続きが検出された。拡張した部分では、図 3 で「近世段階と推定していた石垣」とした部分の下にも現天守閣工事の際の堆積がみられることから、戦後の積み直しと判断した。

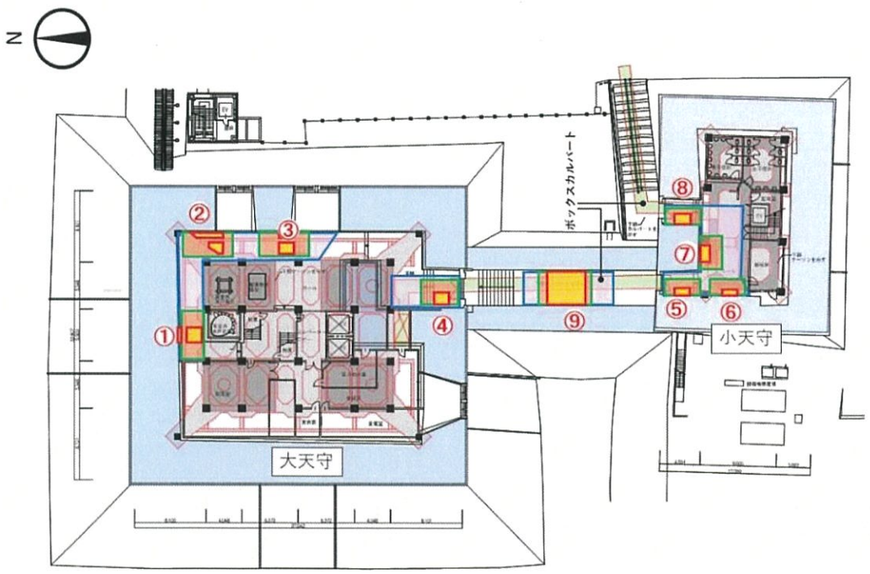


図 1 穴蔵試掘調査箇所位置

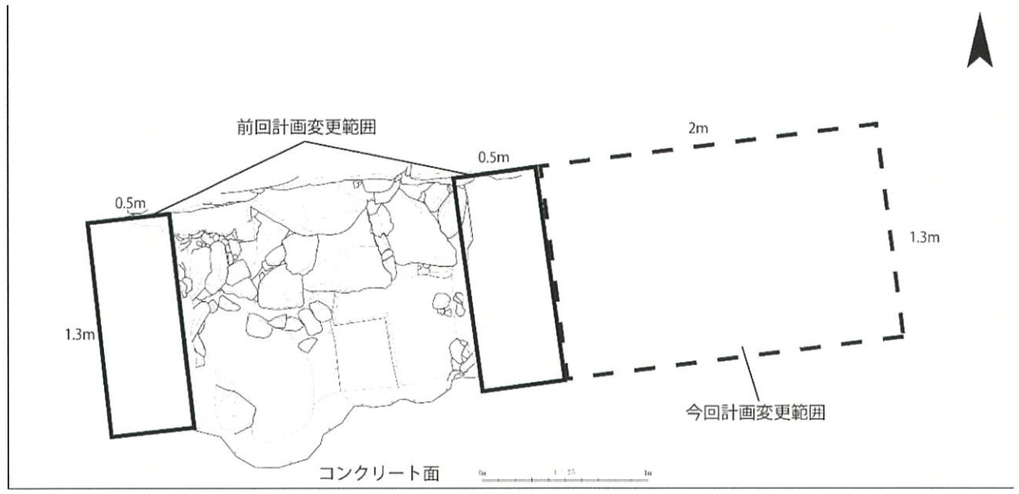


図 2 追加調査範囲

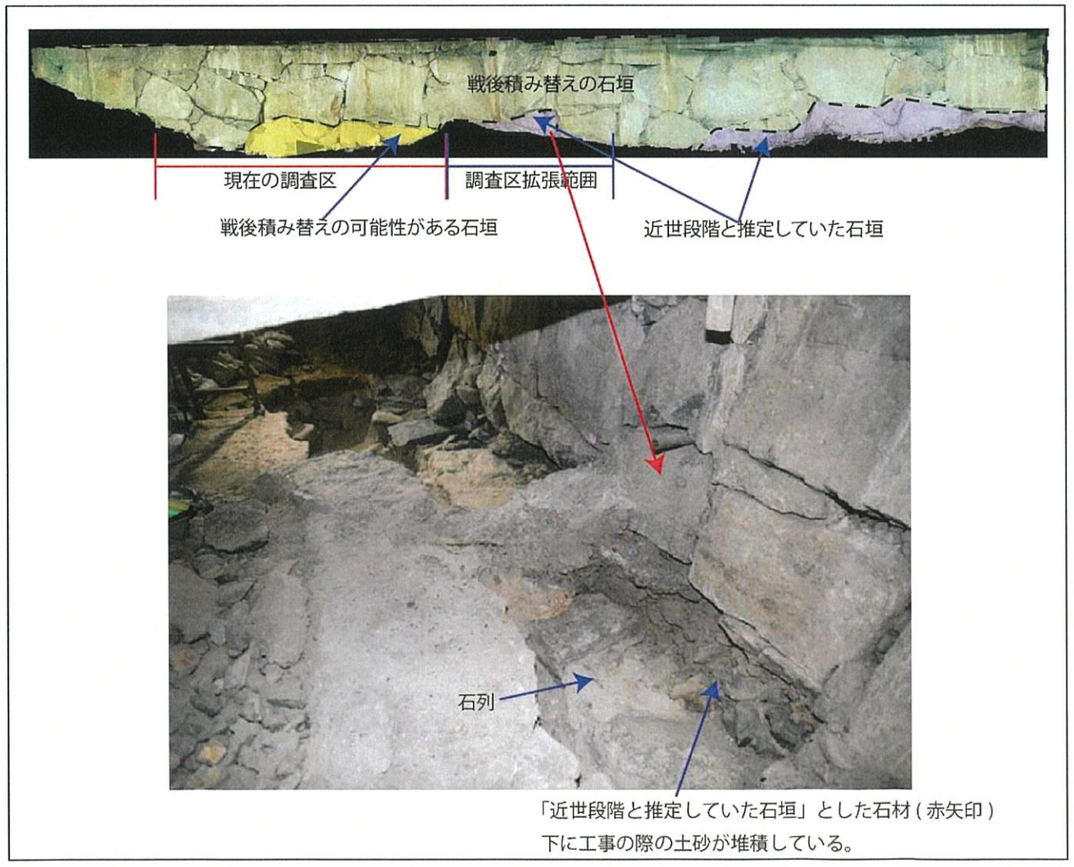


図 3 ①調査区北面石垣の状況